

皆さん、ご卒業おめでとうございます。

本日、博士課程修了者 3 名を含む、合計 60 名の卒業生を公共政策大学院にてお送りする日を迎えられたこと、大変うれしく思っています。コロナの感染拡大のなかで、精神的にも物理的にも制約が大きいなかで、ここまでの道のりを支えて下さったご家族や友人の方々には改めまして感謝を申し上げます。本来であれば、この祝福すべき日を、多くの方々にご参集いただいてお祝いをして頂くべきところ、コロナ感染症の対策のために、人数を限って開催をさせて戴きますこと、何卒お許しを頂ければと思っております。またコロナ禍のために、本日をこの会場で迎えることができなかつた学生の方々にも、私たちは深く思いを致さなければならぬと思っております。

修士課程の皆さんが入学された 2 年前から本日までを振り返ると、この 2 年間は、わが国及び世界が大きく転換する一つの節目の期間として記憶されるのではないかと考えています。まずコロナによってデジタル化が大きく進みました。本来、デジタル化によって、情報格差が解消し民主的でインクルーシブな社会が作られると理想を夢見ていたわけですが、デジタル化が進んだ今の世界は、その理想とはほど遠いことを、私たちは思い知ることになりました。巨大 IT 企業の誕生がその一つですし、国家の統治手段としてもデジタル化が使われ始めたという点もあります。その一つの象徴的な帰結が、今まさに進行しているロシアのウクライナ侵攻ではないかと思えます。

他方で、地球温暖化に向けての意識もこの 2 年間で大きく変わりました。昨年秋グラスゴーでの COP26 を通じて、今世紀半ばに向けて 1.5°C 目標が共通の認識となるなかで、その道筋を明確に社会や投資家に伝え、コミットすることを国や企業がいよいよ求められています。

デジタル化の問題も地球環境問題も、企業の自由な経済活動だけに頼る従来の資本主義の考え方では、到底達成できるものではありません。これまでの資本主義が前提としていた、法・技術・そして経済のそれぞれの制度が、もはや所与のものではなく、政策として相互に関連した形で作り替えられなければならないという、いわゆる新しい資本主義が求められる時代になっています。

新しい資本主義においては、政策立案において新しい考え方が求められると思えます。技術進歩や経済、そして法の実効性に対して大いなる不確実性が漂う中で、一度決めた政策や方針はテコでも変えないという考え方は、もはや全く通用しませんし、誰も幸せになりません。事前にしっかり仮想的な状況に対するシミュレーションを重ねたうえで、政策変更の可能性を政策立案のなかに取り入れながら、現実の変化に併せて機動的に政策の方向性を修正

することが求められます。この考え方は、これまでの一度予算を取ってしまえば、あとは終わりという単年度予算主義の考え方ではうまく行きません。しっかり決算をしめて政策を事後的に評価するという単年度に縛られない視点を持つことにも繋がります。

今後、政策立案における官と民との関係、および学の関わり方が大きく変わると思います。本日は、皆さんの学びにとって一つの区切りですが、学びはここで終わりではなく、これからは社会で活躍しながら、自らの知見を社会に共有して、皆さんのそれぞれの立場から、世の中を良い方向に変えるための出発点にしてほしいと思っています。社会を良い方向に変えたいという思いを持つ人材が社会の各所に一定層生まれることで、本当に国が良い方向に動き出すとおもいますし、わが国が世界に貢献する道も広がるものと思っています。

卒業後、たまに本学に来て、どれだけ成長したのかを報告してほしいと思います。そうした皆さんの門出をこうしてお祝いできることを本日私も大変に嬉しく、また誇りに思っています。

最後に、本日コロナ禍のなか、こうして公共政策大学院での卒業式を挙げるためにご尽力を下さった教職員の方々に深く感謝を申し上げます。

本日は私にとっても院長としての職の一つの区切りとなります。皆さんのますますのご活躍、また卒業後も公共政策大学院の OBOG の一員として、GraSPP の活動でお目にかかるのを楽しみにしています。この度は改めましてご卒業おめでとうございます。